



スカイAカップ 2019プロボウリングレディース新人戦

8月2・3日/ボウリング王国スポーツ八景店

川崎由意が48期で5人目の タイトルホルダーに



▲「この優勝に満足することなく、どんどん成績を残していきたい」と川崎

2019プロボウリングレディース新人戦は、48期から52期までの51名によって争われたが、今年が最後のチャンスの川崎由意(アイキョーボウル/サンブリッジ)が優勝、48期では5人目のタイトルホルダーとなった。17名が出場したアマの部は、高校2年生の幸木百合菜選手(パピオボウル)が優勝した。(主催:(公社)日本プロボウリング協会 特別協賛:(株)スカイ・エー)

予選(8G)、準決勝(6G)を経て、3247を打って断トツの1位の松尾星加(49期)をはじめ、霜出佳奈(50期)、須田久美子(51期)、水谷若菜(50期)、久保田彩花(48期)、坂倉

凛(50期)、川崎由意(48期)、岡田友貴(51期)の8名が決勝トーナメントに進んだ。

1回戦、松尾は279を打って194の岡田を危なげなく退けたが、2位進出の霜出は川崎に

202:234、3位進出の須田も坂倉に176:202で敗れて姿を消した。そして水谷が久保田を235:213で下して2回戦(準決勝)に進んだ。

準決勝第1試合

坂倉と川崎の対戦は、2、5フレのスプリットで前半2つのオープンの坂倉に対し、川崎は1フレから5連発で楽勝ペースかと思われたが、後半ややもたつく間に、坂倉の7フレからフィフスの反撃にあい、227:218と9ピン差の辛勝だった。

準決勝第2試合

松尾と水谷の対戦は、1回戦でセミパーフェクトの279を叩いた松尾が、このゲームではレーンへのアジャストに苦しんで189に終わり、2つのダブル、さらに9フレからターキーで235と伸ばした水谷が優勝決定戦進出を決めた。

優勝決定戦

1フレはともにスプリットだったが、④⑥⑦⑨⑩を3本テイクの川崎に対し、④⑤⑦をナイスカバーの水谷が波に乗るかと思われたが、レーンの攻略に苦しんだ。3フレからのダブルで川崎が追いつくと、水谷は6フレ②④⑩をカバーできずオープン。「ボールを替える勇気がなかった」と悔やんだ水谷を

「10フレ1投目は今日イチの投球だった」と、9フレのストライクをダブルへつなげて突き放した川崎が、216:179で快勝し、待望の初タイトルを獲得した。

川崎のコメント

優勝決定戦の1フレ、ビッグファイブは力が入って内ミスをしたので、修正すれば大丈夫という気持ちがあった。10フレの1投目はしっかり投げた結果、すごくきれいに入ってくれた。勝負どころでちゃんと投げられたのがうれしかった。今大会は、欲しいところでストライクを持ってこることができた。48期はレギュラーツアーではタイトルを6個も取っているの

に、新人戦は優勝がなかったの、48期のだれかが優勝したいねという話をしていたけど、自分が取れて実感はないけどうれしい。グリコセブンティーンアイス杯で初のTV決勝は、自分の甘さを思い知らされたけど、その経験が生きた。(優勝ボール・RADICAL KATANA・LEGEND)



▲「ただただ悔しい」と水谷。プロでの初タイトルはお預けとなった



▲左から優勝・川崎、2位・水谷、3位・坂倉、4位・松尾、アマの部優勝・幸木選手

優勝決定戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
水谷若菜	⑦	9	8	9	9	⑦	1	9	9	9
	19	37	56	75	92	100	120	140	159	179
川崎由意	⑤	3	9	7	9	9	9	9	9	9
	8	28	57	77	97	117	136	156	186	216



ドリスタカップ 2019プロボウリング男子新人戦

8月24日/ドリームスタジアム太田

JPBAにもダブルハンド時代が到来? 両手投げの森元洋行が優勝



◀所属センターの閉鎖もあったが、それらを振り払い歓喜の瞬間

オープンしてこの8月で1周年になるドリームスタジアム太田(群馬県太田市)が特別協賛して「ドリスタカップ」の冠がついた『2019プロボウリング男子新人戦』が、56期から58期の男子プロ41名によって争われたが、森元洋行(56期・Jボウル)が優勝、両手投げとしてはJPBA史上初のタイトルホルダーとなった。(主催:(公社)日本プロボウリング協会)

予選8Gの上位24名が決勝トーナメントに進出。決勝トーナメントは3回戦までは2Gマッチ、4回戦(準決勝)と優勝決定戦は1Gマッチで行われた。上位8名は1回戦シードとなるが、1位通過の会場センター所属の佐藤真啓(57期)が、初戦の2回戦で敗れるなど、波乱の展開のなか、ベスト4まで勝ち残ったのは、水野成祐(24期)の息子・耕佑(56期)と藤村重定(4期)の息子・隆史(57期)の2世プロと、ともに両手

投げの森元洋行(56期)と畠山正寛(58期)という顔ぶれ。

準決勝、森元と藤村の対戦は、7フレからのダブルなどでリードする森元が、9、10フレを連続オープンでヒヤリとしたが、最後までレーンの攻略に苦しんだ藤村を177:166で退け、優勝決定戦に進んだ。

準決勝のもう1試合、畠山と水野の対戦は、5フレからのターキーでリードを奪った水野が、9フレの②④⑥⑧をカバーできず、勝負は10フレへ。ストライク、スペアで201の水野に対し、9本スペアの畠山は最後の投球がストライクなら、同ピンのプレーオフだったが「完璧な投球だった」その1投は⑩ピンタップで、1ピン差で涙をのんだ。

水野と森元の56期生対決となった優勝決定戦は、水野が5

フレ②⑥⑩のスプリット、6フレは①②④⑩をカバーならず連続オープンフレームとつまずいたのに対し、森元は5フレから渾身のターキーで一気に突き放す。7フレからボールを替えて9フレからのオールウェーにつなげた水野だが、反撃も及ばず森元が216:193で制して優勝を飾った。56期ではタイトル獲得一番乗り、またJPBAの両手投げボウラーとしても最初のタイトルホルダーとなった。

森元のコメント

勤めていた博多スターレーンが3月末で閉鎖になって、7月

からJボウルに移ったけど、練習不足で不安が大きかった。だから優勝できるなんて、夢にも思っていなかった。優勝決定戦は、同期対決というよりも、今年が新人戦は最後なので、なんとしても勝ちたいという気持ちが強かった。ただ準決勝から自分のボウリングができていなかったし、4球の練習ボールでもイメージがつかめなかった。5フレからのターキーで勝てたかなと思った。このあとのスケジュールは決まっていないけど、しっかり練習できる環境づくりをしたい。(優勝ボール:コロンビア ザ・ビースト)



▲左から優勝・森元、2位・水野、3位・畠山、4位・藤村

優勝決定戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
水野耕佑	⑩	9	9	9	⑦	2	6	3	9	9
	20	39	58	75	84	93	113	133	163	193
森元洋行	8	9	9	7	9	9	9	9	9	9
	19	39	59	79	109	138	158	177	196	216



◀ボールを替えるのが2フレーム遅れたと水野